

中小おしをついこ入たりけれハ則ち千後の方と云
出しりり

○、木打の中おふしをついこ入たりりこハ押の字

○ 榴の字の書遠るり榴をりふこと云ね之前ひ折
の事く木少て前ひ折をしこて序をほきぬきそ

○ 豊盛此条流の付象貞の物ハ初ふ傍て運
不引たる付の事く
その中へろをへくかして持来りたるなり是後

一 伊友本者累個黒威の腰巻のこり白後若く雑
色ふわらゝ鼓の四席貞原黒草の腰巻のこふ牛
洞の装束して御車とはる

○ 黒系威の腰巻ふんたり腰巻のこり威色同り

○ 黒草威お小見たり

一 悪右衛門曾伝様と赤代の流此車巻小葉をそこの
漢より葉のこを金物おたるふ金飾りのちりと草
白星此かおと小流形おたるといくみた若あり

○ 赤代の流此車巻お小見たり

○ 葉のこを金物と草すりの養流の板此両層と
中と三層に金物と折つをすとすそ金物としふ
神山もこしぬひの板小金物ありと金物と葉
とけりおふしておたる

○ 金飾りの悪神の金飾を金少て飾りたる

○白星のりふと淋形并わくひりあると前小足
たり

一 戦後の中ね成盛ハ俣地の淋此也意より毛き
白の澄おししの毛を今物おたふあふく里ん
の左刀とくは初改のりふととそ忍りの白ヤん毛る
馬より白伏輪のくし重く

○俣地の淋の毛意前のこふぬるし

○毛き白の澄の毛一澄を澄よりぬ

○毛きうあものる右ふりしり

○あうふく里んの左刀毛澄に記しぬ毛澄ふハ疑を

物ししれんハ疑あり毛が毛ハ指文の長伏

輪の毛意くくりれ左刀の毛と毛しハ長ふく里ん
考の毛し

○毛うしハ毛とハ毛とわし初改と毛し

○白ふく里んの毛前より毛る

一 大ねた馬既義初ハ赤化の淋此也意ハ黒系威の
澄ハ淋形打きりあ収かあとの毛としハいらもの
化りの左刀とくし黒將の毛負岸毛のら毛く黒
月毛る馬ふく毛毛毛く月花川より毛川毛り
○赤化の淋の毛意前よりしり
○黒系かしの澄淋形あ収毛赤の毛赤とくしり
○いうわゆりの左刀毛後と毛しぬ

左本らモ本ハケテ
ハ子アカラヌタメニ
ヲモベシ

○ぬし巻のうき巻に記すところ淺きに抄ふらぬ
作の帝の所作のこはくく帝の所かんらんや記し
信し帝の信よりと云ふくも亦あてもをきたるを
しふりしとも古軍ふハ丸あらうと用品作帝のこ
とくを

○^{退考}園本記云帝巻のうき前フニ外フニ只二巻ハし若
フニ斗人の巻をテモ記しテモ其本舎セたるうのしと云ふテモ
丸あらハ其作の所た記してをうす

一 惡法を義平ハ生年十九歳練色きよまじりの由
意ハ八毫とく伯板小勅とハッ打く付たる淺きと云ふ
法のわかとの儲と一の右切と云ふ刀と帝右打の矢
負重友のらねく麻毛ある馬の毛尻りやたる

後記

- 練ききよまじりのてし進れ事きよまじりハ歳長の
若く是練小きしぬ移り色とハうと黄ききり紫未
抄あるた系編の法と用由大編のまを和用と云ふ
キタ奥後とハ一歳ものを色色小練きき
- 八龍と源家五代八領の淺めまじり三本ハ
前ふ凡ハハ
- 右切と云ハ左刀傳來詳あるた
- 重慶のら紫練小凡ハ
- 右打の矢記しぬ
- かみく若練ききしぬ前ふ凡ハ

又本門百ヶ条の
評ふも記しぬ

一 中官大夫の進部長ハ十六条 杉葉の虫意ハおもたう
とくおもたうおとしに志する重代の漢ハ白星の
かやわをそえうひみとうと云ふ力をとくし白星ハ白を此
將よてむいしう矢負二不夜のらおとくす毛たる馬
ハ白伏掃のてと云く

○ 杉葉の初こまのこ杉葉の本色ハ今云さうし葉
あり相曹抄小書ハ系系杉葉を交杉葉なり前
の保え内院月教の漢原系重代ハ風の漢のその
まをくおもたうおとし葉はたうおもたうの系ハ志
ふし也

○ 白星の初と前小志ハしぬ

○ 白鳥の將くくししる矢ハ白鶴の將よてそはくく
くくしてうのこそはるし白鳥の將よてそはく

○ 二不夜のら白ふく矢のつと前小志ハたり

一 右を信佐頼朝十三系保の虫意ハ原をうぬきぬと云
漢と云白星の曹のそしめ替切としふを口と替し
十三系保の深相の矢負重代のらおとく葉毛ある馬ハ
うハく信くはりたる鞍をくそも一不と引立たるこの
るぬきぬ替切ハ原系重代のお此々の中へおとくお此
葉毛ありハ幡及知名と原をとヤリハ二女の付院ハ
あしせよ 汗流せんと信と替なりと云ひくまこと漢とおとし

神子にまゝ見え入ふはさるゝ趣も清きう産衣とハ付られ
りれ

- 傳の初なきまの地知れを色ハ保るり
- 源ちう産衣と云儀ハ源家三代ハ儀のそのまゝ二
世儀小キ少ハ極約十二支の付そくまゝ二
- 白ふしのかあとおたはくたり
- 極切と云方刀の事と本書解儀云むけ切とハ八幡
及貞任家位とせのれハ時度とつけとりのもの
十人の首と切り皆髪とも小切とられハむけ切と
名付たり要列の任人文書と云儀治の儀二
- 十二さいたるハハ腹と十二節考と云儀二四十二さいは源將

- のとハ前ふれしぬ將を源系不保中者たハ保ましぬ
重友のら前まゝ二二
- うしかみはくはりたる鞍を足踏と足なり是後
まひたるハうしかあみはくはりたるくはりたる
おたるとの遠ありはりたるハ腰細をすりたる何
男もさうしハ本とみはくはりのありたる形をまゝり入たる
一 清盛を右れりり傳の重意ハ系系威の腹巻ふた右の
小るとさしてお急ふしりまゝくも産衣ハ一とまゝ
- 傳の重意あて記しぬ
- 系系威もあて記しぬ
- た右の小るとさしてとらひたるハ腹巻ふた右の

いづれは後をれはふきさしてといへぬこゝの後をえ来
○ 小のち悔りしるも後をハ根の下のたをるおた
○ 依りたるものも後をのふと云むハなし後ふ
○ 暖をを後代小上山も若事ふたりその時ハ後の
○ 小のちさしてそらうこれハ後をふ右の小ちとて
○ とりたる又後をハ後の下にそらう若のお也神も
○ なきもの之後代小若る付ハ後の神となく付る
○ これハ海平 盛衰記をとも後をふ小のちと付るを
○ ちう事 而もふえたりそよの事枝突知ぬ人き
○ ちう事 付るを清くするを

○ 折るをし 川をくくとハ曹の下に折るをしとゆりたるが

神事出るとくかたぬきとあらしと川をく曹
まくをくけたらと川をくまらとくあたるも
○ 川をくくむしのもあらしハ中をくくいう中も

○ 折るをし 又川をく川をく

一 左邊の佐重盛ハ—— 赤地の綿此重意ハはりの白の
後ふ蝶のまを全おたふ 就此の曹此綿とと先
小鳥といふ左りと帯切符の糸負重友のち持くさり
きける馬小柳核よりたる貝 鞍重をそふなり

- 赤地の綿の重意 赤のふく
- 白の白ひの後ハ後を清ふ記しぬ
- 赤を全おたふなり

一 大地と道とく比の行りまきりり忠成これを見ま
くこそぬけ丸とハ付れれ一物書出大東去る
作しり

○ ぬけ丸は朱詳なれぬけ丸と名付られハ
忠成の時より尚後の美を形給り一物書
出

一 緋の初これ小黒系威の隠そく思懐の古刀を
思ふ所の矢原漆去毫度めり持く思ふる小思
をく系より

○ 緋の赤黒思系威の隠思く出みる希みたり
○ 思懐の古刀ハ柄鞘思ぬり金を志やくとあり

但し金おもろり物係後方ハ一云々の思懐の
古刀ハ古事ハ付れくき古刀ありこれハ思
ぬりともハ方々の思懐の古刀ハ方々と云ハ金
金限すく入り物ゆる云あひとり年も後有
云々と云ハ金も思ぬりけり物あり一帯とり
年小も後あり藍草と用之

○ 思懐の矢を思懐の思ふるすしほらねの
思懐より志すん

一 義朝より尺多ひくゆりは源氏ハむちこ一まてもあは
るものハたきいふのうむ

○ むちさハる副の会人新と云はるなり